

日本におけるレズビアン・ミニコミ誌の 言説分析

— 1970年代から1980年代前半まで

杉浦郁子 *SUGIURA Ikuko*

- 1 — 目的
- 2 — 1910年代から1960年代までの女性同性愛言説
- 3 — 1970年代以降のレズビアン解放運動—および資料の位置づけ
- 4 — レズビアン・フェミニズムの言説—1970年代後半
- 5 — 「タチ／ネコ」の用法—1980年代前半
- 6 — 結語

【要旨】本稿は、日本のレズビアンたちによる集合的な活動が発信したテキストを分析し、その主要な言説を跡づけようとするものである。1970年代から1980年代前半までのミニコミ誌が、1960年代に一般に流通した「レズビアンには男役（タチ）と女役（ネコ）がある」という言説へどのように介入したのかを中心に記述する。

なお、本稿は、近代日本形成期（1910年代から1960年代まで）の「女性同性愛」の言説史を整理した拙稿（杉浦 2015）の続編に位置づけられるものであり、レズビアン解放運動がさらなる盛り上がりを見せる1985年以降の言説分析へと橋渡しされるものである。

1 — 目的

本稿の目的は、1970年代以降の日本におけるレズビアン解放運動の発行物の言説を、「性欲」の視点から分析することである。

「女同士の親密な関係」や「女を愛する女」に対し、近代以降の日本がどのような意味を与えてきたのかをたどろうとする研究、すなわち「女性同性愛」言説の変容をとらえようとする研究は、2014年までに一定の成果をあげている。筆者はそれらの研究をレビューすることで、近代日本形成期以降の言説の特徴をまとめる作業をした（杉浦 2015）。拙稿では、女性同性愛をめぐる言説史研究の到達点と今後の課題を明らかにすることをめざしたが、そのさい、既存の成果を「性欲」の視点を軸に整理することを重視した。

「性欲」の視点とは、「大正期に定着してから現在まで様々な仕方で構築されてきた『性欲』という領域が女性同性愛に関する言説をどのように枠づけてきたのか、反対に、女性同性愛に関する言説が『性欲』という領域をどのように枠づけてきたのか、という視点のこと」をいう（杉浦 2015: 2）。ミッシェル・フーコーに触発された日本版「セクシュアリティ

ィの歴史」研究は、「性欲（セクシュアリティ）」という領域の日本的な構築や受容のありようを描くために、様々な対象を取り上げてきた。もちろん、女性同性愛もそうした対象のひとつである。

人々の行為や関係性、出来事や状態などが「性欲」との関連でどのように理解されるのかという問いは、セクシュアリティ研究の基軸をなしている。近代日本形成期から1960年代の言説を扱った女性同性愛研究は、この問いに取り組んでいるという意味において、まさにセクシュアリティ研究である。しかし、1970年代半ば以降に登場したレズビアン解放運動の言説は、いまだ「性欲」の視点から十分に分析されていない。これが拙稿で示した言説史上の課題であった。本稿は、この課題に取り組もうとするものである。

2——1910年代から1960年代までの女性同性愛言説¹⁾

杉浦（2015）では、近代日本形成期から1990年代半ばまでの言説を大まかに3つの時期にわけて検討した。その区分けにしたがえば、本稿で取りあげる資料は「第三期」にあたる。第三期の資料の検討は、「第一期」および「第二期」の言説との（不）連続性を念頭に置いてなされるものであるため、まずは、第一期と第二期の支配的言説の特徴をまとめておきたい。

2-1 第一期——1910年代から1930年代半ば

第一期は、1910年代から1930年代半ばまでで、「女学生」間の親密な関係が「同性愛」という言葉とともに問題化されていった時期である（肥留間2003）。この時期に完成した認識枠組みは、「女性同性愛には一時的・精神的・後天的でいずれ異性愛に向かっていく『仮性』と、男性化した女性による永続的・肉欲的・先天的で矯正できない『真性』とがある」というものである（赤枝2011）。

「仮性／真性」の別は、女性たちの階層に応じて割りふられたことがわかっている。豊かな階層であった女学生たちの極端な親密さは、「仮性の同性愛」だと見なされ、「性欲」不在の、情愛あふれる「女らしい」実践として無害化された（赤枝2011）。それに対して、女工・女給・看護婦などの下層や地方出身の女性たちの親密な関係は、肉体的な接触を伴う「真性の同性愛」だと当然のように考えられた。その理由として、黄綿史（2008）は、下層の女性が「性的に墮落している」というイメージを背負われていたこと、また、働く女性は「女性性」を喪失した存在として、もっと言えば「女らしくない性欲の持ち主」「男らしい能動的な性欲の持ち主」として認識されやすかったことをあげている。下層の女性たちの身体の内には「能動的な性欲」がはめこまれ、彼女らの親密性は「異常な性欲」に導かれたものと理解された。

こうした認識の基底にあるのは、「男性の性欲は能動的であるのに対し、女性のそれは受動的である」とするヘテロセクシズム²⁾である。戦前の「女性の同性愛は2種類ある」と

いう言説は、「性欲のあり方は男女で異なる」という知に枠づけられていた。つまり、それは同時に、ジェンダー非対称の「性欲」を再生産する言説だった。

2-2 第二期——戦後から1960年代

第二期は、戦後から1960年代までで、「女性同性愛者」という主体が徐々に形成されていた時期である。この時期の言説の特徴として、女同士の関係における肉体的な接触が自明視されるようになったこと、つまり女性同性愛が性欲化されたことが指摘されている。

1940年代後半の記事を分析した赤枝香奈子(2014)は、それらが戦前(第一期)の同性愛観を踏襲しつつ、女学生時代の同性愛(=エス)を「ポルノ化」していった事態を記述している。その背景には、戦後の混乱期に発行されたカストリ雑誌³⁾が露骨な性描写を売りにしていたことがあるという。カストリ雑誌は、様々な親密な関係をポルノグラフィックに描いたが、女同士の親密性もその対象となったのである。

1950年代前半の性風俗雑誌⁴⁾を分析した埜田光(2014)は、それらがやはり戦前の「仮/真の同性愛」という枠組みを維持しつつも、戦前と異なり「仮」より「真」のほうに注目していること、また、戦後の性科学が治療の余地を作り出すために「真の同性愛」に後天性・可変性という意味を与え直したことを明らかにしている。さらに、1955年に性風俗雑誌に掲載された記事を分析した赤枝(2014)は、いわゆる『キンゼイ報告』⁵⁾が女同士の関係に性行為があることを自明とし、戦前の「仮/真」の認識枠組みを覆したと論じている。このように、戦後の雑誌メディアは、女性同性愛をソーシャルな関係からセクシュアルな関係へと一気に読みかえていったのである。

ところで『キンゼイ報告』は、女性間の性的な関係を指す言葉として「レスビアン」を使ったが、1960年代に入ると、大衆向けの雑誌(一般雑誌)がこの外来語を多用するようになった。1960年代後半以降、女性同性愛言説は「レス(ズ)ビアン」(以下「レズビアン」で表記を統一)という概念を軸になされていくことになる。筆者は、1960年代後半(1967年から69年)の一般雑誌記事において、「レズビアン」という概念を介して世間から注視されたのは、女のどのような性欲だったのかを分析したことがある(杉浦2005, 2013)。

1960年代の「レズビアン」には、歌劇の男役やその女性ファン、男装のバーテンダーやバーに集まる女性、ときには「エス」など、今から考えると雑多な女性が放り込まれていた。しかし、「レズビアン」という概念が可視化したのは、男らしさを売りにする「玄人」ではなく女性的な「素人」、なかでも「芸能」「社交」ではなく「性的な刺激」を楽しむ女性、さらには性行為で「男役」ではなく「女役」を担当するとされた「若い」女性の性欲だった。そのような「レズビアンの女役」は、何らかのきっかけで開花した性欲を抑えることなく、女とのセックスで男とのセックス以上の性的快感を得る女性として描かれている。問題とされたのは、このような、性的な主体性を発揮する女の性欲だった。また、その性欲が「女へ向かうから」というより「男の能動性に支配されないから」恐れられたのだというのが、杉浦(2013)における分析である。一般雑誌の記事には、男の性的な主体

化を攪乱する女への恐怖や不安が表現されている。

とはいうものの、1960年代後半以降の記事は、「レズビアン」の性行為とテクニックを執拗に描写するポルノであり、男性の異性愛的欲望を満足させるものでもあった。それらの記事は、見方によっては「性的な主体性を獲得した女」を表出していたが、同時に「性に奔放な女」というレズビアンのステレオタイプを流通させたのであり、1970年代、80年代を通して一般社会に偏見をまき散らした。

3——1970年代以降のレズビアン解放運動—および資料の位置づけ

「第二期」にねつ造されたステレオタイプへ介入し、画一的かつ否定的な「レズビアン」イメージの変更を迫ろうとする活動が見られるようになったのが「第三期」であり、具体的には1970年代から1990年代前半までである。1970年代に入ると「女性同性愛者」「レズビアン」などのアイデンティティをもつ女性たちが自らの経験を発信するようになり、彼女らの発信の場としてミニコミ誌が相次いで創刊された。

本稿で観察する資料は、主として、1970年代以降のレズビアン解放運動のなかで発行されたミニコミ誌であるため、ここで運動の展開をごく簡単にまとめておく。ただし、以下は、首都圏におけるレズビアンの集合的な活動を大まかに拾ったものであり、その他の地域の活動は含まれていない。本稿は、首都圏の動きのなかで残されたテキストを分析するものである。

3-1 首都圏における運動の展開——「第三期」について

3-1-1 1970年代

レズビアンによる最初の集合的な活動は、1971年に発足したレズビアン・サークル「若草の会」だと見られている。鈴木道子（1950-）が「仲間と出会いたい」という思いから設立し、約15年続いた。その間、少なくとも500人以上が入会したと見積もられている（広沢1987:113）。会の活動は、会誌の発行、毎月の茶話会、年に1回の小旅行などで、会員同士の交流に力が注がれていた（福永1982:98）。

1970年代後半になると、若草の会のやり方に物足りなさを感じていた女性たち、「ウーマン・リブ」「女の運動」と接点のあった女性たちが相次いでミニコミ誌を発行する。『レスビアンの女たちから全ての女たちにおくる雑誌 すばらしい女たち』（1976年11月、以下『すばらしい女たち』と略記する）、『ザ・ダイク』（1978年1月に第1号、6月に第2号）、『ひかりぐるま』（1978年4月に第1号、9月に第2号）の3誌が知られている。

3-1-2 1980年代

1980年代前半には「レズビアンフェミニスト・センター」と「シスターフッドの会」の活動を確認できる。1985年には『れ組通信』（1985-2013）が創刊され、長期にわたり発行を続けた。『通信』の制作に関わった女性たちは、その後、レズビアンのためのスペース「れ

組スタジオ・東京」(1987-2013)を開設したり、宝島社から出された『女を愛する女たちの物語 (別冊宝島 64)』(1987)を編集したりしている。これらの活動に携わった一部の女性らが後に発行したミニコミ誌に『瓢駒ライフ——新しい生の様式を求めて』(1988-1992)がある。

3-1-3 1990年代

1992年には掛札悠子を書いた『「レズビアン」である、ということ』(河出書房新社)が話題になり、翌年からレズビアン自身が企画編集に加わった「レズビアン特集」が一般雑誌で立て続けに組まれた。掛札は、レズビアン・コミュニティ外部への働きかけだけでなく、内部のネットワーク化にも積極的で、ミニコミ誌『LABRYS』(1992-1995)を発行したり、レズビアンとバイセクシュアル女性のためのセンター「LOUD」(1995-)を開設したりした。

なお、1990年代後半は、「性同一性障害」という概念の普及により、「レズビアン」から「男性化した女性 (オナベ)」の離脱がはかられた時期である。この時期は、「レズビアン」の構成員に入れ替えが生じるほどの意味変容があったこと (Sugiura 2006) に加え、セクシュアリティ研究、ジェンダー／フェミニズム批評、クィア理論などの出版物が一気に増えたことから、第三期とは異なる局面に入ったと見なすことができる。

本稿は、第三期に照準するが、紙幅の都合上、実際に分析できるのは1970年代から1980年代前半までの言説である。1980年代後半から1990年代半ばまでの言説は、続編で取りあげる。

3-2 首都圏のグループによる発行物——資料の概要

本稿が検討する資料の中心は、第三期に首都圏で結成されたレズビアン・グループが発行した定期刊行物で、限られた読者に向けられたいわゆるミニコミ誌である。次ページの表にそれらのミニコミ誌を発行した「グループ名」、ミニコミ誌の「タイトル」「発行年月」をまとめた⁶⁾。

また、発行されたことはわかっているものの未だ入手できていない資料もある。未入手の資料は、表の「現物ないしコピーの有無」の欄が「×」になっている。日本初のレズビアン・サークル「若草の会」は不定期で会誌を発行していたのだが、それらは手に入っていない。そのため、第三期のうち70年代前半の言説については、一次資料にもとづいた分析ができない状況にある。1970年代後半以降のミニコミ誌にも未入手の号があるが、そこに収録されている記事のいくつかは『資料日本のウーマン・リブ史 III』(1995)で読むことができる(表の「備考」欄に『リブ史 III』に転載された記事のタイトルを記載した)。したがって、1970年代後半以降については、おおよその流れをたどれると判断している。

レズビアン・グループの活動に関わった女性たちが文章を発表する場合は、ミニコミ誌以外にも存在した。1970年代から80年代前半には、ウーマン・リブの活動家が編集を担当していた雑誌『女・エロス』『あごろ』に、グループ名やペンネームで書かれたレズビアンに関する記事がある。1980年代中頃には、『婦人公論』にレズビアンに関するエッセイが複数掲載

表 レズビアン・グループおよび定期刊行物リスト（1970年代から1995年まで）

グループ名	定期刊行物タイトル	発行 年月	現物／ コピー の有無	備 考
若草の会	会報	1971-?	×	・不定期
	『Eve & Eve』 創刊号	1982.8	○	・「日本最初のレズビアン雑誌」、自費出版
	『Eve & Eve』 第2号	1983.12	×	
「すばらしい女たち」 編集グループ	『レスビアンの女たちから全ての女たちにおくる雑誌 すばらしい女たち』 創刊号	1976.11	○	
	『すばらしい女たち別冊〈レスビアンに関するアンケート〉集計とレポート』	1976.11	○	
まいにち大工	『ザ・ダイク』 創刊号	1978.1	×	・「『まいにち大工』の紹介と方針」『リブ史 III』 238-239 ・織田道子「闘う女たちへ」『リブ史 III』 239-240
	『ザ・ダイク』 第2号	1978.6	○	
ひかりぐるま	『ひかりぐるま』 創刊特 別号	1978.4	×	・「レズビアン宣言'78 〈拡散から収束へ〉 三つのひかりぐるま」『リブ史 III』 242-245 ・「世界からの風『ハイト・レポート』の翻訳をめぐって」『リブ史 III』 245
	『ひかりぐるま』 第2号		○	
レズビアン フェミニスト・ センター	※定期刊行物は確認できず。センター名義で書かれた記事については備考欄。	1978.9 1980- 83?		・1980「女のエネルギーを女へ！」『ポルノグラフィは女への暴力である』／『リブ史 III』 57 ・1981 レズビアンフェミニスト・センター・スライドグループ「ポルノグラフィは女への暴力である」『女・エロス』 16: 5-18 ・1982「Good Meeting を持つために」『女から女たちへ』 No.39／『リブ史 III』 304-305 ・「強姦はロマンチッククラブが変装を脱ぎ捨てた姿だ！」1982『声なき叫び』／『リブ史 III』 354-355
シスターフッド の会	『レズビアン通信』 創刊 号	1982.9	×	・小野れい「なんたらかんたら思うこと」『リブ史 III』 63-63
れ組のごまめ	『れ組通信』 (1-22 号)	1985.5- 1987.3	○	・1987 年 2 月『れ組通信・サンフランシスコ版』 発行
れ組スタジオ・ 東京	『れ組通信』 (1-294 号)	1987.3- 2013.2	○	・1995 年 12 月発行は 105 号 ・2013 年 2 月に事務所をとり『通信』発行も終了、以降はオンラインにて発信
ひょうこま舎	『瓢駒ライフ：新しい生の 様式を求めて』 (1-7 号)	1988.5- 1992.9	○	
掛札悠子 (責任発行)	『LABRYS』 (0-10 号)	1992.?- 1995.12	○	・本誌 0 号は未入手 ・本誌 0-10 号に加え、情報 3,4,5,6,7 号あり

注) 未入手のミニコミ誌に掲載された記事の一部は、溝口明代・佐伯洋子・三木草子編 (1995)『資料日本ウーマン・リブ史III』松香堂書店に転載されている。備考欄に転載された記事のタイトルと「リブ史III」における掲載ページを記載。

されているが、それらもグループ活動に関わった女性が書いたものである。1990年代に活動の中心にいた掛札悠子は、女性誌だけでなく論壇誌や学術雑誌にも寄稿している。

このように、ミニコミ誌を刊行した女性たちは、ミニコミ誌以外のメディアでもそのつど執筆の機会をとらえている。前ページの表には掲載していないが、それらの文章も観察の対象に加える。『女を愛する女たちの物語』(1987)はミニコミ誌ではないが、やはり分析に活用する。いずれも、ミニコミ誌の制作者たち、グループ活動を担った女性たちが発信した言説として、ミニコミ誌同様に扱えるものと考えている。

3-3 レズビアン・グループの発行物はどのように分析されてきたか

ところで、本稿が観察する資料の存在は、レズビアンによる集合的な動きをまとめた年譜や歴史記述が必ず言及するほど、よく知られている。なぜならそれらは、「同性愛は異常／異性愛は正常」という見方を相対化し、女同士の親密な関係に積極的な意味を与えるという目的を明確に打ち出したものだったからである。

そのようにして記憶される資料であるにもかかわらず、そこに掲載された記事の内容にまで踏み込んだ研究はわずかで、管見では、飯野由里子(2008)と拙稿(杉浦2008)のみである。以下で2つの研究の概略を紹介し、いずれも本稿とは異なる視点から資料を取りあげていることを示す。

飯野は、2008年に『レズビアンである〈わたしたち〉のストーリー』(生活書院)を上梓し、そのなかで、1978年に発行された『ザ・ダイク』『ひかりぐるま』、1987年に発行された『れ組通信』(れ組スタジオ・東京)の記事を検討している。各記事は、本のタイトルのとおり「レズビアンである〈わたしたち〉のストーリー」として位置づけられている。それは、すなわち「『レズビアン』というカテゴリーを用いながら、女性たちがそれまで存在していなかったような〈わたしたち〉という集合性を創造・形成しようとしたストーリー」(飯野2008:53)である。飯野は「共感しながらそれらを『読みなおす』」(2008:28)という作業に取り組んでいる。この本では、全部で3つのストーリーが「分断」を乗り越える契機を宿すものとして再読されている。たとえば、それらのストーリーには、「リブの(異性愛の)女」と「レズビアンの女」との、あるいは「在日コリアンのレズビアン」と「日本人のレズビアン」との結びつきを回復させるモメントがある、というような「新たな読み」が示されるのである。

飯野の著書は、グループ内部で対立や排除が生じたときに、どのようにレズビアンの連携が模索されたのかを扱っている。その過程では「レズビアンとは何(者)か」「レズビアンのグループの目的は何か」などの問いが発せられるため、「レズビアン」というカテゴリーに過剰な意味が与えられていくことになる。しかし、飯野は、「レズビアンであること」の意味の変容を歴史的にたどることはしない。なぜなら、本書が重視するのは、「関係の回復」や「連携」の可能性を読み込むことを通して当時の活動を再評価することだからである。

他方、杉浦 (2008) は、1970 年代後半のミニコミ誌を「レズビアン・フェミニズム」の活動と位置づけ、とりわけその草分けの『すばらしい女たち』が発行された経緯を跡づけることをめざしている。ミニコミ誌に掲載された文章、リブ系の雑誌に掲載された文章などを適宜用いているが、そこでの論証を主に支えるのは、ドキュメント資料ではなく、70 年代の活動を担った女性たちの口述資料 (インタビュー・データ) である。また、それは、『すばらしい女たち』の刊行を日本のレズビアン・コミュニティの歴史を画す特筆すべき活動ととらえ、その組織化をうながした背景や要因を探った歴史記述であり、したがって、言説分析でさえない。

このように、次章以降で分析される資料は、言説分析のために使われたこともなければ、「性欲」の視点から眺められたこともない。そこで、本稿では、「レズビアン」として発せられた数々の言葉を「性欲」という領域や経験を構築する言説として再分析し、1970 年代以降の女性同性愛に関するテキストから「性欲 (セクシュアリティ) の歴史」を編むという課題に取り組みたい。

4——レズビアン・フェミニズムの言説—1970年代後半

ここからようやく具体的な分析に入る。この第 4 章では、1970 年代後半のレズビアン・フェミニズムの活動が生んだ言説を中心に取りあげる。続く 5 章では、それへの反作用として現れた言説を 1980 年代前半のテキストから抽出する。

4-1 「レズビアンには男役と女役がある」という言説をめぐる

先述のとおり、1960 年代後半以降の一般雑誌は、「レズビアンの女役」を「性に奔放な女」として描いたが、この表象の前提には「レズビアンには男役と女役がいる」という認識がある。この認識は、たとえば次のように定式化され、たびたび誌面に登場していた。「女同士といっても、そこにはちゃんと男女の関係が存在する。男役の女性のほうをこの世界の隠語で“タチ”といい、女役 (?) の女性のほうを“ネコ”または単に“ネ”と呼ぶ」(『週刊漫画サンデー』1966/11/23: 56)。

では、レズビアンたちが組織したグループは、「レズビアンには男役と女役がある」という言説とどのように付き合ったのだろうか。

4-1-1 「若草の会」会報において

1971 年発足の「若草の会」の会報は未入手であるが、福永妙子 (1982) によれば、会報には会員のプロフィールや交際を希望する人のメッセージが掲載されていたという。加えて、プロフィールやメッセージを出した人の特徴が、会長ないしは会の判断として、名前の上に記入されていたという (福永 1982: 88-89)。その特徴は、次のように類型化されていた。「外見女性的 (内面リードされる)」「外見女性的 (内面リードする)」「外見女性的 (内面相

手により違う)」「外見男性的 (男装)」「外見ボーイッシュ (内面リードする)」「外見ボーイッシュ (内面相手により違う)」「外見普通 (内面相手により違う)」「外見普通 (内面リードする)」(福永 1982: 28) の 8 タイプである。

「外見」は、「女性的」「男性的」「ボーイッシュ」「普通」の 4 つに分けられている。それに対し「内面」は、「リードされる」「リードする」「相手により違う」の 3 つであり、「内面」の特徴を「外見」に変則的に割りふることで 8 つのタイプが作られている。会員の特徴を表現する類型が 8 つもあったことは注目に値するが、この 8 タイプが「男役／女役」を基準にして考案されていることは見やすい。

なお、本論の関心にしたがえば、ここで「内面」と表現された領域に「性欲」がはめ込まれているかが問題となる。限られた情報だけで断定はできないが、同時代の一般雑誌が示していた言説の影響を鑑みれば、「リードされる／リードする」という記号が「性行為における受動性／能動性」を連想させても不思議ではない。

また、くり返しになるが、戦前には「女性の同性愛には仮性と真性の 2 種類ある」という認識があった。戦後すぐに、「性欲」不在の「仮性」が「女性同性愛」から外れ、この認識が覆された。しかし、その後も「女性同性愛」や「レズビアン」を「分類する」という志向性は維持され、さらに、分類のさいに用いられる指標がジェンダー (男／女らしさ) とセクシュアリティ (性欲の濃淡) である点に戦前との共通性が見られる。すなわち「若草の会」が用いた類型は、戦前同様、性欲をジェンダー化するヘテロセクシズムに則ったものである。

いずれにせよ、「レズビアンには男役と女役がいる」という認識は、若草の会での出会いや関係性を規定するような枠組みだったと推察される。そして、70 年代後半のレズビアン・グループは、この認識を明確に批判していく。

4-1-2 「男役」批判

1976 年に発行された『すばらしい女たち』は、リブ新宿センター⁷⁾で出会った女性たちによって編まれたミニコミ誌である。これに続く『ザ・ダイク』『ひかりぐるま』(いずれも 1978) も、その編集を担ったのはレズビアン・フェミニズムの主張に触れ、ジェンダーの構築性に自覚的な女性たちであった⁸⁾。

レズビアン・フェミニズムは、「異性愛という制度」を女性抑圧の根源と見なし、その制度を転覆する手段としての可能性を「女同士の関係性」に託す思想と実践である。それは、異性愛という制度を、同性愛を排除するものとして批判するだけでなく、女性を役割のなかに押し込め不自由を強いるものとして問題にする。このような問題意識は、たとえば「レズビアンフェミニスト・センター」による以下の文章に端的に表現されている。

レズビアンとは「女が男なしで生きられない、また生きてはならない」という社会の押しつけに挑戦する女のことである。レズビアンは結婚制度を支えない。いわゆる家

庭を作らない。経済的自立をしている。自分で自分の身を守る。性差別社会が与える女の役割と、男に従属することによって受ける保護や恩恵を拒否している。その結果、既存の女のイメージから外れ、女らしくないという理由で偏見や抑圧を受けている。しかし、そのことは女の置かれている状況をより鮮明に浮き上がらせているのである。(『女のエネルギーを女へ!』1980→『リブ史 III』1995: 57)

「レズビアンが男女のような固定的な役割関係を築く」という想定をレズビアン・フェミニストたちが批判したのは、思想的には当然のことだった。たとえば『ザ・ダイク』を発行したグループ「まいにち大工」は、その方針として「五、わたしたちは、男女間に多く存在する支配－依存の関係に反対し、同時に、これを模倣する『男役』『女役』という役割の思想に反対します」(『ザ・ダイク』vol2: 11) という項目を掲げている。『ひかりぐるま』には、「わたしたちは、自分たちを、男役、女役という狭い枠の中に押し込めようとするあらゆる圧力を拒否する。レズビアンが、この社会の性役割の罠にとらわれて既成の男女関係の戯画を演じているうちは、わたしたちの中からもなにも生まれはしないのだ」(『ひかりぐるま』vol2: 3) と述べる批評が掲載されている。

その批判の矛先は、非対称の関係を内包した制度としての異性愛のみならず、男装をする女性個人にも向かった。

男装した女は男と女の関係に基く社会組織を肯定的に受け入れてそのままそっくり男の役割を演じ、男が女にするように女を扱っているのではないだろうか。この考えはフェミニストの考えと相反する。我々はこういう考えは絶対に受け入れない。(『すばらしい女たち』vol1: 35)

ある日のパーティで、他の女を性的対象物とみるような態度をとった女がたった一人いたことで、パーティのイメージがぶち壊しになったことがあった。私たち女が、一番嫌だと思っている男のような態度をとったレズビアンがいたことが残念だったし、それに対して、嫌なのに嫌だと言えない女の態度も残念だった。(『ザ・ダイク』vol2: 10)

中には、女の役割を拒んではみたものの、一体自分は何者なのかという新たな問いの答えを見出す術を持たず、この世には〈男〉と〈女〉しかないのだから、〈女〉でなければ〈男〉だ、という凸凹式の短絡をした女たちもないわけではない。彼女たちは、いわゆるタチと呼ばれる人達であり、男装して男になり切ろうという不毛な罠に陥った女たちである。(『ひかりぐるま』vol2: 3)

ここでは、異性愛という制度に対する批判が、制度に絡めとられた個人に対する批判へと横滑りしており、その帰結として、「男装した女」「男のようにふるまう女」「タチ (男役)」

を「レズビアン」から押し出そうとする力が生じている。

70年代後半のレズビアン・フェミニズムには、「男役」を疎外しながら、「レズビアンには男役と女役がいる」という言説に介入するという特徴があった。さらに書き添えれば、「他の女を性的対象物とみる」「男のような態度」を拒み、性欲をあからさまに表現する者を排していくことは、性的な積極性を「レズビアン」から切り離していくベクトルとなり得るものであった⁹⁾。

4-2 「レズビアンにはふたとおりある」という言説——「生来的」と「選択的」

このように、レズビアン・フェミニズムのグループは、「レズビアン」を「男役」と「女役」に分類する言説を無効化しようとした。その一方で、「レズビアンにはふたとおりある」とする別の分類を流通させている。その「ふたとおり」は、『すばらしい女たち』において、仮に「生来的同性愛」と「積極的同性愛」と名づけられている。この分類がどのようななされているのかわかる箇所を、少し長くなるが引用する。

同性愛という場合に、二とおりある気がする。ひとつは、「同性なのに、こんな気持ちになるのはおかしいのだ」と思っても、それでも奪われた心をどうすることもできない、そんな魅かれ方である。それは、「たぶんふつうの人は男性に対してこのような好きになり方をするのだ」と思わざるを得ない、ある、友情のごときものとはちがった、特殊の感情である。

(中略)

こういう感情は、友だちに対する好意とは少し異質だと、わたしは思っている。恋に混乱はつきものだけれども、友だちに対する感情に混乱は存在しない。また、たとえばその人の手が肩にふれたとたんにすべてが停止し、自分の性的情熱を思い知らされる、というような感情のつきあはれは友情には存在しない。

ところでわたしはこういうことを書くことによって、それが恋愛だとか愛することだなどと言うつもりはさらさらない。人を愛するという場合、いろんな愛し方、魅かれ方があって、その中でこういう魅かれ方を「意志に関係なく」同性に対して感じる女たちがいるということである。そしてこの種の魅かれ方が、従来一般的に「同性愛」ないしは「同性愛的」と呼ばれてきた感情なのだと思う。

(中略)

これがひとつめである。これをかりに「生来的同性愛」と呼ぶことにしたい。この表現はよくないと思うし語弊もあるけれども、今うまい言い方がみつからないので、あえて使っておく。これに対して、「積極的同性愛」と呼び得る同性愛がある。これは、もともと女の方が好きだったというわけではないが、何らかのきっかけで同性への愛にめざめたというような人達にみられる。そのきっかけは、たとえばまたまこのうえなくすばらしい女性に出会って心が開かれたとか、あるいは何らかの理由で男

というものに愛想をつかしてしまって、一方で女性のよさを発見するようになったとか、思想的に女性の自立をめざす過程で同性に対する友愛と連帯の深まりが「わたしたちは同性をこんなふうにも愛することができるのだ」という感動をともなった再発見を生み出していったとか、いろいろであろう。共通していえることは、愛の対象として同性を選んだ（＝発見した）といいうる出発をもつことだ。

従って、こういう場合は概して否定的な悩み方が少ない。もちろん自分の発見した新しい感情に自分自身とまどって悩む人たちも多いけれども、それはだれしも社会の偏見からすぐには自由になれないというところにおいてであって、とりわけ「積極的に選んだ」といえる人たち、すなわち女の自立と女への愛が結びついていった人たちは否定的な悩み方はしていないようだ。またこういう場合は、友情と恋愛の区別などないという人たちが多い。（『すばらしい女たち』 vol1: 44-45）

これとは別の著者が「私は子供の頃から自然に女の方へ心が惹かれてきたいわゆる生まれつきのレズビアンだ」（『すばらしい女たち』 vol1: 56、傍点は筆者）と述べていることから、「ふたとおりある」という認識は、この時期にすでに、ある程度共有されていたことがうかがえる。

「生来的同性愛」は、「意志に関係なく」同性に魅かれ、つきあげるような「性的情熱」を経験するようなタイプであり、もうひとつの「積極的同性愛」は、愛の対象として同性を「選んだ」と言えるようなタイプである。この分類では、ジェンダーという指標が破棄され、かわりに「生得的／選択的」という指標が採用されている。そして、この線引きの最中で、理性でコントロールしがたい「(同性への) 性欲」があらかじめインプットされている身体と、そうでない身体とが切り出されることになる。

この分類を示した著者は、自身を「選べないで同性愛者であることの苦しみをよくも悪くもひきずってこざるをえなかった生来的同性愛者」（『すばらしい女たち』 vol1: 46）だという。そして、とすると「積極的同性愛者」に抱いてしまう反発や不信をいったん脇に置き、「女を愛すること」を肯定的に受けとめるその積極性を学ばなければならないと述べている。

このような「レズビアンにはふたとおりある」という認識や、「選択的」なタイプへ向けられる屈託は、約5年後の1980年代前半のテキストでも確認できる。

レズビアンには大まかに言ってふたとおりあるように見える。自分がレズビアンであることに何らかの思想的根拠を持っている人達と、そういうものを持っていない人達である。前者は女性解放運動に結びつきやすく、このレズビアン通信に関わっている仲間はおおむねそういう人達に見える。（表現があいまいだが、なにしろ前回、お初にお目にかかったただだからよくわからないのだ）私自身はどういう人間かということこれまた、はなはだあいまいである。いい女もいい男も好きだし、思想らしきものを

手造りのごくささやかな形で首にぶらさげてはいるが、言動は嘆かわしいほど直感的で、常に情にサオさして流されている。

おそらく私のような者は、このレズビアン通信の仲間の動きが運動としてラディカルなものになっていけば、いずれ落ちこぼれるであろうと思っている。自分が他の仲間とどのように同じでどのように違うのか、落ちこぼれるとすればどういうところでそうなるのか、そのへんを見きわめたくて私はこれに関わっている。(小野れい「なんたらかんたら思うこと」『レズビアン通信』1982→『リブ史Ⅲ』1995: 63)

この文章を書いた小野れいも、自分を「直感的で」「情に流される」タイプだと言い、「思想」や「運動」と結びついているタイプがますます主流になっていけば自分は「落ちこぼれる」と述べている。小野は自分とは違う「選択的なタイプ」に対し「なんたらかんたら思うこと」(記事タイトル)を綴っているのである。

思うに、「生来的」と「選択的」とに分けることの重要性は、レズビアン・フェミニズムの運動に関わっていた「生来的」なレズビアンの側にあったのではないか。思想に沿うような「あるべきレズビアン」が規範化されていくなかで、思想「以前」ないし「外部」にあると感受されるようなレズビアンの経験——たとえば「意志に関係なく」同性に魅かれるような情緒的・身体的経験など——を書き記そうとすると、この線引きが利用されているように見えるのである。

なお、本稿では、紙幅の都合により、「生来的／選択的」という言説のこの先の展開を詳細に書き下ろせないため、ここに簡単な見通しを付記しておく。「生来的／選択的」の別は、1990年代前半まで、それなりに影響力のある言説として存在しつづけた。1980年代後半には「根っから派／転向派」と呼び名が変わるものの、この差異を意識したテキストが散見され、1990年代前半には「選択した」と語る女性を「レズビアン」とは異なる存在として他者化しようとする動きも現れている。

5 — 「タチ／ネコ」の用法 — 1980年代前半

レズビアン・フェミニズムが示す「レズビアン」の輪郭が鮮明になるにつれて、そこからはみ出す人の違和感も語られるようになっていく。1980年代前半には、そうした違和感が主に「若草の会」と関わりのあった人々によって言語化されている。本章第1節では、その様子を紹介する。

続く第2節では、レズビアン・フェミニズムと距離を置くテキストにおいて、「タチ／ネコ」という概念がどのように用いられているのかに注目する。そこで記述したいのは、「タチ／ネコ」という概念がその意味を徐々に狭め、主に性的な経験をあらわしているという事態である。

5-1 表明される違和感

前章の最後に引用した小野による文章には、注目すべき続きがある。それは、「タチ（男役）」個人へのバッシングをけん制する内容である。

自分と違う人達を「違うのだな」という形で認めることは大切であると思う。ここからは話はもうひとつのポイントに移る。運動みたいなものに関わっていると当然の成り行きとして自分達の主義主張と違う人々との差異を明らかにしていく、批判していくことになる。それがなければ運動は成り立たないのだが、その批判の際の態度について、私はひとつ自分ではっきりしていることがある。「違う」人達を侮辱してはいけないという事である。批判と侮辱とは違う。

具体的に話をしよう。一例をあげれば俗に言う「タチとネコ」のタチの人達について、「男のコピーにすぎない」と言う人もいる。たとえ男のコピーのように見えることがあっても、その当人はその人なりの生い立ち、環境、考え方、また現在の生活の中から自分の生きる形をえらび取って、その人なりに真剣に生きているのである。自分が何者であるかを明らかにするために他を批判することと、軽蔑をこめてののしることとは違う。公的な場で（仲間だけでいても、運動の場は常に公的なものなのです）他を侮辱する言葉を発してはいけません。（小野れい「なんたらかんたら思うこと」『レズビアン通信』1982→『リブ史Ⅲ』1995: 64）

また、小野は、若草の会が自費出版をした『Eve & Eve』創刊号（1982）で、レズビアンへのインタビュー記事 11 本（うち 3 本はカップルへのインタビュー）をまとめている。全 68 ページの労作であり、小野がすべてのケースの聞き手・編集を担当している。

小野のインタビューを受けた「松井はるみ（23 歳）」は、次のように、「男らしさ」のみならず「女らしさ」を身にまとうことに不寛容な「リブ的な」活動になじめなかったと語っている。

—— さっき、リブ的なことにかかわってたっておっしゃいましたが、どのようなことだったんですか？

松井 すごく、窮屈なものでした。まず、男らしさ女らしさってものの、認めなかったでしょ。だから、スカートはくのもお化粧するのも、周りの目を気にして……。それでも、スカートはきたいときもあるから着ていくと、「どうしたの、そんな媚売って？」とか、お化粧なんかしていると、「目のまわり黒くしてどうしたの？」とか……。そういう感じで。私、やっぱりリブの人達って身なりとか構わないのネ。お化粧もしない、顔も剃らない……。そのときはそれが正しいと思ってたけど、いまはやっぱり……。

—— リブの運動みたいなことは、もう全部嫌ですか？ それともあなたの気持ちにあ

った形のものなら？

松井 すべて嫌だとは思ってないけど、いまのリブとかそういうのは参加したくない。結局、リブってのは同じレズビアンでも、頭から入ってくるでしょ。水商売で男装してる人のことなど、「ああいうのを商売にしている……」って、毛嫌いのネ！ 私はネ、男装してる人はしてる人で、ああいう男装で街の中を歩くだけでも大変だと思うんですよネ。だから、その人たちはそういう形で世間に対して運動してると思うの。だけどそういうもの、決して認めない……。

(『Eve & Eve』1982: 19)

若草の会の会長の鈴木道子は、『婦人公論』に寄せた文章(1983)で、「レズビアン」を均質化しようとする動きへの違和感を表明し、その多様性を強調している。

もうひとつ、申しそえておきたいことがあります。それはレズビアンとひとくちに言っても、いろいろな人がいるのだという、ごくあたりまえのことです。(中略)なぜ男ではなく女を愛さなければならないのか、という問題ひとつとってみても、自分では理由はわからないけれど、とにかく男性には魅力を感じないからという人もいるし、先にも述べたように過去に男性についていやな体験をしたからという人もいるし、また現在の男性支配の社会のありかたについての抗議として、またそういう社会で形成される男性の考え方や女性に対する態度が不快であるから、女をえらびとったという人たち(レズビアン・フェミニスト)もいます。どれが正統のレズビアンであるということは決められません。とにかくどういう形にせよ、自分の生きる道を女性と結びつけていこうとしている、という共通点があるだけです。(鈴木1983: 344)

前章で「若草の会」には会員を8タイプに類型化する方法があったと述べた。その方法にはヘテロセクシズムの影響が刻まれているとはいえ、それでも「会」に集った人々の多様性を何とか表現しようとする工夫があったと解釈できるものである。「外見」に4つ、「内面」に3つの選択肢があり、それらを掛け合わせることで二元的なジェンダーでは表現できないものを指し示していたからである。

小野は、『Eve & Eve』創刊号のなかで、「レズビアンには、タチ・ネコの役割にこだわらないタイプと、はっきりと自分の役割をきめているタイプがある」(1982: 57)と書いており、「タチ／ネコ」の関係性を実践する人々を「レズビアン」に包摂する認識を示している。そうした認識や「相手により違う」というレトリックは、担い手の世代が入れかわる1990年代の活動でよく聞かれた言説であることを書きとめておく。

5-2 多様な「性欲」を語るための回路——「タチ／ネコ」をベースにした分類学へ

レズビアン・フェミニズムが「タチ／ネコの役割」を批判するさい、「役割」という概念

は、外見、性格、ふるまい、労働、生活、性欲や性行為などに至るまで、個人やカップルにおける諸側面の傾向を総体的にとらえる概念として用いられている。他方、『Eve & Eve』創刊号のインタビュー記事に注目すると、「タチ／ネコ」は、主に性欲や性行為のありようを指す概念として、つまり、比較的限定された意味で使われている様子を観察できる。

『Eve & Eve』のインタビューでは、同性を「選んだ」という経験を話している人はおらず、「生来的／選択的」という尺度を用いるのなら「生来的」とされるレズビアンたちが取材に協力したようだ。聞き手の小野が繰り出した質問は、「レズビアンだと自覚したのはいつか」「女性のどこが好きか」「女性に魅かれることに原因があると思うか」「現在の／前の彼女のことを聞かせて」「家族のこと」「仕事のこと」「子どもはほしいか」「カップルを長続きさせるコツは」「解放運動についてどう思うか」「後からくるレズビアンに言っておきたいことは」などが主なものである。あらかじめ準備したと思われるこれらの質問を軸に、話の流れにまかせて比較的自由に話を聞いている。

また、このインタビューでは、全員から性的な体験を聞きとっている。その聞き方は、以下のように率直である。さらにそこでは、「タチ／ネコ」という概念（「能動的／受動的」という枠組み）が頻繁に使われている。

- ・肉体関係の経験は、何度かあるんですか？（『Eve & Eve』1982: 6、以下はページ番号のみを記載）
- ・女性との初体験の時、どんなこと思いましたか？（10）
- ・SEX のことと言ったら、タチとかネコとか……。 （11）
- ・俗によく、タチとネコとか、そんな言い方をすることについて……。あなたなんか、これはもう誰が見ても受け身って感じると思うんだけど。このことについて、さっき相手によって、どうにでもなるっておっしゃってたけど、どうですか？（15）
- ・女の人とは、そういう体験なさったことありますか？（21）
- ・特にひっぱりさん（タチ）の存在ってのは、男の人にはわからないと思うんですが、自分で“いく”っていうことは、ないんでしょ？（29）
- ・女の人とあなたは……抱きたいと思うの？ 抱かれたいと思うの？（35）
- ・俗に言うタチとかネコとか、そのあたり……。 （40）
- ・タチとかネコとか、そういう点では、あなたは？（46）
- ・俗にタチとかネコとかについては、どうですか？（53）

「タチかネコか」と聞かれたとき、聞かれた側はそれを「性行為で能動的か受動的か」の意味だと理解し、自分の性欲や快楽のありようを「能動的／受動的」の枠組みを用いて表現している。もちろん「自分はタチ／ネコだ」と明言する人もいる。しかし、この枠組みに収まりきれない性欲や性行為を示している人のほうが目立つ。「両方」「どっちでもない」「フィフティ・フィフティ」「7割ぐらいの受け身」「相手によって」「以前と変わった」など、

様々な性欲のかたちを伝えていくのである。

- ・ネコ専門です。(11)
- ・タッチはさせなかったのネ。私はタチだったのネ。相手に触らせなかった！ それのみに生きてきた、というか、相手に触らせるようになったのは、いまの人からネ。(33)
- ・両方入ってる。犯したい、犯されたい……。フィフティ・フィフティ。(中略) 若い頃は、相手の体を触って満足だったけれど、やっぱり、触ってるだけじゃ“いけない”もんネ。何らかの形で、事後処理してたわよ、自分で。それが、相手が加われば……すごく快感が倍増しません!? 一方的じゃ嫌なの。お互い“触れっこ”しなくちゃ！(35)
- ・タチっていうと「抱く」ことなの。ネコは「抱かれる」でしょ。そういう、男女の役割を、ストレートの形をそのまま引き写したような役、それは嫌なんです。私はレズビアン！ 前は“両方”って言ってたんですけどネ…。それも変だになって……。(40)
- ・私はどっちでもないネ。そのときそのときだネ…。やっぱり、してやったら、してもらってのが当然だと思うネ。好きだったら、触って貰いたいし、触れたいしネ…。一方的ってのは、わからないネ。(46)
- ・七割くらいの受け身になっちゃうと思いますけど……。相手によって。好きになれば、あんまり関係ないと思いますネ。(53)

以上から、「タチ／ネコ」という概念をめぐって、いくつかのことを指摘できる。①「タチ／ネコ」は、主に性欲や性行為のありようを指す言葉として、その意味を限定しつつある。②「タチ／ネコ」は、自らのセクシュアリティを理解したり他者に伝えたりするさいの拠り所となっている。③「タチ／ネコ」は、画一的な「レズビアン」イメージを社会に拡散した一方で、女性の同性愛的欲望とその多様性を可視化するための言語的資源としても機能している。

加えて、④「タチ／ネコ」ではないセクシュアリティは、比較的柔軟で変わりうるものという意味を獲得しているが、「タチ／ネコ」は固定的・本能的なものと思なされる傾向がある。たとえば、以下のテキストがその一端を示している。

タチとネコの役割を重視するレズビアンにとっては、そういう立場にない者が考えるほど、“自分の役割を変える”ことは簡単ではない。理屈で採用したものなら、再び理屈に従ってそれを捨てることもできる。しかし、ほとんどのタチあるいはネコにとって、その役割は、直感的に選びとったほとんど本能に近いものであり、また、愛の経験の中で確かめられ、強められてきたものである。心とからだにしみこんでいる自分

の形は、上着を取りかえるように変えられるものではない。(『Eve & Eve』1982: 58)

再び先取りしておけば、「タチ／ネコ」は、1990年代には「性行為で能動的な側／受動的な側」という極めて限定的かつ明確な意味で使われるようになる。また、そのバリエーションとして「リバ(=reverse/liberty: タチ／ネコ両方できる)」が加わり、「タチ／ネコ寄りのリバ」「バリタチ／バリネコ(タチ／ネコ専門)」などの表現や、外見とセクシュアリティを掛け合わせた「スカタチ(スカートをはくタチ)」「ズボネコ(ズボンをはくネコ)」「フェムタチ(フェミニンなタチ)」などの合成語も生み出された。このような「タチ／ネコ」をベースにした分類学は、レズビアンたちがカテゴリーとその意味を生成していくことでできあがったものであり、ハーベイ・サックス(H. Sacks)のいう「カテゴリーの自己執行」の実践としてとらえられるものである(Sacks 1979=1987)。「タチ／ネコ」をめぐる自律的な概念実践を通して、どのようなセクシュアリティが可視化されるのか。「タチ／ネコ」がセクシュアリティのみを指示する概念として定着したことの効果は何か。これらの問いに取り組むことが続編での課題となる。

6——結語

本稿では、1970年代前半から1980年代前半までの、レズビアンによる集会的な活動が生みだした言説を跡づけた。本研究が重視する「性欲」の視点からポイントをまとめると、次のようになる。「男役(タチ)／女役(ネコ)」という概念は、もとより「セクシュアリティの能動性／受動性」という意味をともなっていた。したがって、「男役／女役」の役割や「男役」個人を批判するレズビアン・フェミニズムは、「レズビアン」を脱性化するという言説上の効果をもち合わせていた。しかし、1980年代前半の対抗言説では、「タチ／ネコ」という概念をフックにして、女性の同性愛的欲望や性的快楽がかなり自由に語られていた。

紙幅が尽きたため、観察対象に含めた「第三期」のテキストをすべて消化できず、多くの課題を積み残した。何よりもまず、1985年から1995年までのテキストを分析しなければならない。そのさい、「生来的(根っから派)／選択的(転向派)」の別や「タチ／ネコ」の用法の展開をたどることは、女性のセクシュアリティの自律的な管理という観点や、ジェンダー非対称に構築されたセクシュアリティの攪乱という観点において、不可欠な作業となるだろう。また、本稿で分析したテキストには、「バイセクシュアル」や「結婚しているレズビアン」に対する批判も見られた。80年代後半以降に前景化する争点であるが、ここでは扱えなかった。今後の課題としたい。

《注》

- 1) 第2章は、杉浦 (2015) の要約である。
- 2) ここでヘテロセクシズムとは、異性愛を絶対視したうえで、男の能動性と女の受動性の組み合わせで成り立つ性関係を望ましいものとする規範である (江原 2001: 138-158; 竹村 1997)。
- 3) カストリ雑誌とは、1946年10月から49年6月までに発行された大衆一般を対象とした読み捨て本のことである。粗悪な紙を使っていることや、エロ (性風俗)・グロ (猟奇) の内容がその特徴とされる (松沢 1995)。
- 4) 同性愛・異性愛を問わず「普通でない」とされた「変態性欲」を専門に扱う、カストリ雑誌以後の時期に販売された雑誌のことを、石田仁 (2006: 91) にならって「性風俗雑誌」と呼んでいる。
- 5) 『キンゼイ報告』は、アメリカ白人男女の性行動に関する調査報告であり、その邦訳は男性篇が1950年に、女性篇が1954年に出版された。1950年代後半以降、クラフト＝エビングやエリスなどヨーロッパの性科学ではなく、キンゼイが「科学的権威」として影響力をもつようになったという。
- 6) 本稿で取りあげたミニコミ誌の多くを、麻川まり子氏、沢部ひとみ氏、若林苗子氏 (50音順)、「れ組スタジオ・東京」にご提供いただいた。ここに記して感謝の意を表する。
- 7) リブ新宿センターは、東京の代々木に1972年9月30日に開所したウーマン・リブの拠点である。
- 8) 1970年代後半にミニコミを編集したグループは、自分たちが「レズビアン・フェミニズムのグループである」と自覚していたと思われる。たとえば、『すばらしい女たち』には、「れずびあんふえみにずむ」というタイトルのイラストページがある (1976: 33)。『ザ・ダイク』を発行した「まいにち大工」も、自らのグループを「レズビアン＝フェミニストのグループ」だと紹介している (『あごろ』1978: 142)。
- 9) 日本のウーマンリブが女の身体やセクシュアリティについて積極的に語ったのに対し、その影響を受けたレズビアン・フェミニズムでは、それらの問題が後景に退いている。運動が身体性と切り離されているという論点を、ここでは十分に論じられなかった。今後の課題としたい。

《文献》

- 赤枝香奈子 2011 『近代日本における女同士の親密な関係』 角川学芸出版。
- 2014 「戦後日本における『レズビアン』カテゴリーの定着」 小山静子・赤枝香奈子・今田絵里香『セクシュアリティの戦後史』 京都大学学術出版会, 129-151。
- 江原由美子 2001 『ジェンダー秩序』 勁草書房。
- 福永妙子 1982 『レズビアン——もうひとつの愛のかたち』 大陸書房。
- 広沢有美 1987 「日本初のレズビアン・サークル『若草の会』 その15年の歴史と現在」『女を愛する女たちの物語——日本で初めて! 234人の証言で綴るレズビアン・リポート』 (別冊宝島 64) JICC 出版局, 111-119。
- 肥留間由紀子 2003 「近代日本における女性同性愛の『発見』」『解放社会学研究』 17: 9-32。
- 飯野由里子 2008 『レズビアンである「わたしたち」のストーリー』 生活書院。
- 石田仁 2006 「戦後日本における『男が好きな男』の言説史——雑誌記事にみる表象とそれを支える解釈枠組みの変容」 中央大学大学院文学研究科博士論文。
- 黄綿史 2008 「言説としての『女性同性愛』の誕生——1910年代～30年代の下層階級における『同性愛』関連記事の分析」 法政大学大学院国際文化研究科修士論文。
- まいにち大工 1978 「グループ紹介 まいにち大工」『あごろ』 18: 142。
- 松沢呉一 1995 「カストリ雑誌と『ガロ』の永井さん」『性メディアの50年——欲望の戦後史ここに御開帳!』 (別冊宝島 240) 宝島社, 23-31。
- 溝口明代・佐伯洋子・三木草子編 1995 『資料日本ウーマン・リブ史 III』 松香堂書店。

- 李田光 2014 「性科学の言説と『女子同性愛者』の主体化——戦後から 1950 年代における日本の性風俗雑誌の言説分析」一橋大学大学院社会学研究科修士論文。
- Sacks, H. 1979 “Hotrodder: A Revolutionary Category,” Psathas, G. (ed.), *Everyday Language: Studies in Ethnomethodology*. 山田富秋・好井裕明・山田敬一訳 1987 「ホットロッダー——革命のカテゴリー」『エスノメソドロジー——社会学的思考の解体』せりか書房, 19-37.
- 鈴木道子 1983 「レズビアンの会を主宰して 10 年」『婦人公論』1983/01: 340-344.
- 杉浦郁子 2005 「一般雑誌における『レズビアン』の表象——戦後から 1971 年まで」『現代風俗学研究』11: 1-12.
- 2008 「日本におけるレズビアン・フェミニズムの活動——1970 年代後半の黎明期における」『ジェンダー研究』11: 143-170.
- 2013 「男の猥談に現れる女の性欲——1960 年代雑誌記事の『レズビアン』言説」中河伸俊・赤川学編『方法としての構築主義』勁草書房, 115-133.
- 2015 「『女性同性愛』言説をめぐる歴史的研究の展開と課題」『和光大学現代人間学部紀要』8: 7-26.
- Sugiura, Ikuko 2006 “Lesbian Discourses in Mainstream Magazines of Post-War Japan: Is Onabe Distinct from Rezubian?” *Journal of Lesbian Studies*, 10(3/4): 127-144.
- 竹村和子 1997 「資本主義とセクシュアリティ——[ヘテロ] セクシズムの解体へ向けて」『思想』879: 71-104.
- 「深く静かに流行する“レスビアン”——女が女を愛する現代の異常な性風俗」『週刊漫画サンデー』1966/11/23: 54-57.

————— [すぎうら いくこ・和光大学現代人間学部現代社会学科准教授]